泉鏡花『琵琶本』小攷

――蠟燭と嗅覚のリアリティ――

西尾元伸

はじめに

泉鏡花は、明治四十二年から没年となる昭和十四年まで番町に暮らした。『琵琶本』（大正2）は、鏡花のいわゆる〈番町もの〉といわれる作品のひとつである。

二七不動尊の縁日の夜、御堂に燃えさしの蠟燭をもらいにきた男がいた。男は蒼い顔をして頬が痩け咳をしていた。その様子を見た講の世話方のひとり、下塗りの欣八は火付けを疑い、刑事に扮して男を問いただす。すると男は進藤延一と名乗り、燃えさしの蠟燭の匂いを好む女郎・白露の話をはじめた。進藤の家に案内された欣八は、進藤が蠟燭を固めて緋の長襦袢を着せた人形を抱く狂態を目撃して逃げ出す。ところが、三月と経たぬうちに欣八は就寝中の妻の髷に蠟燭を突刺して火傷を負わせ発狂する。作品は「怪むべし、其の友達が、続いて――また一人。……」と閉じられる。

これまでの研究においては、本作の素材について、鏡花自身が小品『番茶話』（大正15）中の「蛙」章に述べていることが知られる。[1] 鏡花は、友人・谷活東（鏡花とおなじく紅葉門下）が遊んだ際に体験した「あらゆるキルクの香を嗅ぐ」合方の挿話と、志賀直哉から聞いた「西洋の小説」にあるという「狂気の如く鉛筆を削る奇人」[2]の話から、『琵琶本』の宿場女郎を着想したという。

また本作の読解をめぐっては、吉田遼人が「発狂の連鎖というモティーフ」を指摘したほか、怪異の「日常生活圏」への越境や、作品発表の大正二年には東京に火災の発

生が多かったこと、進藤延一が煩っているであろう結核のことなどを取り上げ、作品の同時代性がもたらす問題に言及している。また、そのような同時代的要素によって恐怖は「読み手」にも迫ることになるという。吉田遼人氏の論考は、本作について考察すべきことの多くを指摘して詳細に論じている[3]。

本稿では、これらの指摘に導かれつつ、本作の語りのなかに前近代的怪異譚が意識されていることを起点として考察してみたい。そのような語りのあり方と作品の読解とが、どのように関わるのか探ることを目的とする。

一、

『崑蒻本』の怪異譚において中心となるのは、刑事に扮した下塗の欣八が聞かされる、女郎・白露にまつわる進藤延一の話である。ふたりの会話は、以下のようにはじまる。

「む、、御苦労様か。……だがな、余計な事を言はんでも可い。名を言はんかい。何てんだ、と聞いてるぢやないか。」

「進藤延一と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、変に学問をしたやうな、ハイカラな名ぢやねえか。」

と言葉じりもしどろに成つて、頤を引込めたと思ふと、をかしく悄気たも道理こそ。刑事と威した半纏着は、其の実町内の若いもの、下塗の欣八と云ふ。此は又学問をしなさうな兄哥が、二七講の景気づけに、縁日の夜は縁起を祝つて、御堂一室処で、三宝を据えて、頼母子を営む、……世話方で居残ると……お燈明の消々時、フト魔が魅したやうな、髪蓬に、骨豁なりとあるのが、鰐口の下に立顕れ、ものにも事を欠いた、断るにも一寸口実の見当らない、蠟燭の燃えさしを授けて貰つて、消えるが如く門を出たのを、卜伸上つて見て居た奴。（三）

発端は、「学問をしたやうな、ハイカラな名」を持つ進藤と、頼母子の世話方という「学問をしなさうな」いわゆる職人風の「下塗の欣八」との出会いにあった。実は、本作の語りがやや誇張してみせるこのような差異にこそ、『崑蒻本』という作品の特質は顕れているように思われる。

あらためて、舞台となる「二七の不動尊」、および「番町」について確認しておきたい。「風俗画報」臨時増刊

『新撰東京名所図会』第十九編（明治32）「麹町区之部」[4]には、「二七不動縁日の図」の口絵が掲げられ、「番町」の項目中「神社　仏舎類」の箇所に「光明教会所不動尊　三番町十番地に在り。毎月二七の日を以て縁日とす。世俗之を呼みて二七不動といふ」とある。毎月二七日の縁日は相応の賑わいを見せたようである。作品中では、語り手は以下のように述べていた。

　此の七の日は、番町の大銀杏と、もに名高い、二七の不動尊の縁日で、月六載。かしらの二日は大粒の雨が、丁ど夜店の出盛る頃に、ぱら〳〵生暖い風に吹きつけたゝめに――其の癖すぐに晴れたけれども――丸潰れと成つた。……以来、打続いた風ツ吹きで、銀杏の梢も大童に乱れて蓬々しかつた、其の今夜は、霞に夕化粧で薄あかりにすらりと立つ。

　堂とは一町ばかり間をおいた、此の樹の許から、桜草、菫、山吹、植木屋の路を開き初めて、長閑に春めく蝶々簪、娘たちの宵出の姿、酸漿屋の店から灯が点れて、絵草紙屋、小間物店の、夜の錦に、紅を織り込む賑と成つた。……（一）

「番町の大銀杏」については鏡花宅前にあったものであろうと指摘される以上のことは未詳だが[5]、本作が当時の番町の風物を取り込んで成立していることは確かである。そして、縁日にあわせて行われる頼母子の世話方という職人体の欣八の存在は、対する進藤が小石川の東京工廠に勤務していたことと対照してみれば、前近代的なものと映るはずである。

　番町はそもそも前近代的な怪異譚にまつわる土地である。二七不動へあらわれた進藤について述べるとき、語り手は次のような言葉を差し挟む。

　ひた〳〵と木の葉から滴る音して、汲かへし、掬びかへた、柄杓の柄を漏る雫が聞こえる。其の暗く成つた手水鉢の背後に、古井戸が一つある。……番町で古井戸と言ふと、びしよ濡れて血だらけの婦が皿を持つて出さうだけれども、別に仔細はない。……参詣の散つた夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々あるから、唯思ふと或は其かも知れぬ。（一）

　これが「番町皿屋敷」の伝承を指しているのは間違いなかろう[6]。先述の『新撰東京名所図会』第十九編でおなじく「番町」の項「地理」の中に名前の見える「帯坂」は、作中、次の引用箇所にも登場するが、「皿屋敷」のお菊が髪

を振り乱し帯を引きずって通った坂だという。[7]

また、蠟燭の燃えさしを持って帰ろうとした進藤を、欣八が呼び止めた場面は、次のように語られる。

往来留の提灯は最う消したが、一筋、両側の家の戸を鎖した、寂しい町の真中に、六道の辻の道しるべに、鬼が植えた鉄棒の如く標の残つた、縁日果てた番町通。なだれに帯板へ下りようとする角の処で、頬被した半纏着が一人、右側の、廂が下つた小家の軒下暗い中から、ひた〳〵と草履で出た。

声も立てず、往来留の其の杙に並んで、ひしと足を留めたのは、あの、古井戸の陰から、よろりと出て、和尚に蠟燭の燃えさしをねだつた、何故、其の手水鉢の柄杓を盗まなかつたらうと思ふ、船幽霊のやうな、蒼しよびれた男である。（三）

進藤は、怪異「船幽霊」のような「蒼しよびれた男」と言われている。鳥山石燕『今昔画図続百鬼』（安永８）には、「皿かぞへ」と「舟幽霊」とが並んで描かれている。[8]もっとも鏡花は『海異記』（明治39）にも「房州も西向の、館山北条とは事かはり、其の裏側なる前原、鴨川、古川、白子、忽戸など、就中、船幽霊の千倉が沖、江見和田などの海岸は、風に向いたる白帆の外には一重の遮るものもない、太平洋の吹通し、人も知つたる荒磯海」（『海異記』一）と記しており、[9]「船幽霊」を千葉県の伝承と認識していたのだろう。そうすると「西国または北国」のものとする石燕『今昔画図続百鬼』の詞書とは合わない。ここでは本作の語りが好んで前近代的怪異譚に言及するのを確認するに留めておきたい。

二、

進藤が白露のいた桔梗屋に遊んだいきさつについては、作品の四章から六章にかけて語られている。『菎蒻本』の語りについて、吉田遼人氏は「進藤の語りが、あとに示される欣八の語りに内包され」る「重層化した語りの構造」を指摘している。これに従えば作品の四章から六章の内容は、進藤が欣八に話した内容と重なることになろう。

その日、酒に酔った進藤は、人力車の提灯に用いた蠟燭をもらい受けて桔梗屋という妓楼を訪ねた。「見附で外濠へ乗替へようと云ふのを、ぐつすり寝込んで居て、素直ぐに運ばれてよ、閻魔だ、と怒鳴られて驚いて飛出したんだ」（四）と言うのからすると、進藤は四谷見附で外濠線

に乗り換えて市ヶ谷の自宅まで帰ろうとしたところが、終点の新宿まで寝過ごしてしまったらしい。雇った車夫に訪ねると、現在「大木戸から向つて左側」（四）であるという。それで、「牛鍋のじわ〳〵酒に、夥間の友だちが話し」（八）たという蠟燭の燃えさしを欲しがる女郎のすぐ近くまで来ていると知り、これを試してみたくなったのであった。車夫の提灯の蠟燭で煙草に火をつけた進藤は、「蠟燭の香を、芬と酔爛れた、此処へ、其の脳へ差込まれました、めに、ふと好事な心が、火取虫と云つた形で、熱く羽ばたきをした」（八）と言う。仲間たちが噂に話した言葉は、蠟燭の「香」によって身体的なリアリティを得て、ことによると進藤の性欲を刺激したのかもしれない。この女郎の正体を見定めようとするかのように、進藤は白露を知ることになったのであった。（噂の言葉と蠟燭の「香」とのかかわりについては、後ほどあらためて検討する。）

もっとも『莨蒻本』の語り手は、進藤の話したいきさつをそのままに伝えている訳でもなさそうである。進藤が桔梗屋へ飛び込んだ場面を、次のように語るからである。

さて酔漢は、山鳥の巣に素見く、梟と云ふ形で、最一度線路を渡越した、宿の中ほどを格子摺れに伸しながら、染色も同じ、桔梗屋、と描いて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたやうに、横店の電燈が映る、暖簾を、さらりと肩で分けた。よし此処とても武蔵野の草に花咲く名所とて、廂の霜も薄化粧、夜半の凄さも狐火に溶けて、情の露と成りやせむ。

「若い衆。」

「入しやい！」

「遊ぶぜ。」

「難有う様で、へい、」と前掛の腰を屈める、揉手の肱に、ピンと刎ねた、博多帯の結目は、赤坂奴の髯と見た。

（中略）

帳場から、

「お客様。」

満更でない跫音で、丁々と踏む梯子段。

「入らつしやい。」と……水へ投げて海津を掬ふ、溌溂とした声なら可いが、海綿に染む泡波の如く、投げた歯に舌のねばり、どろんとした調子を上げた、遣手部屋のお媼さんと云ふのが、茶渋の蕎麦切を搦ませた、遣放しな立膝で、お下りを這曳いたらしい、さめ

た餛飩を、くぢや〳〵と啜る処――

横手の対立が稲塚で、火鉢の茶釜は竹の子笠、唯見ると暖麺蚯蚓の如し。惟れば嘴の尖つた白面の狐が、古蓑を裲襠で、尻尾の褄を取つて顕はれさう。（五）

まるで進藤が狐狸に化かされる類の怪異譚を体験すると言わんばかりの口調であることが理解できよう。ここでも、『莨蒻本』の語りは前近代的な怪異譚めいたものといえる。

しかし、もちろんのこと桔梗屋は、客に怪異を提供する場ではない。前近代的な怪異譚の舞台かのように語られていながら、その実は極めて現実的な場所でもある。次に引用するのは、進藤の対手が白露と決まった場面である。ここでも、白露を「狐塚の女郎花」などと言うところには、先に述べた怪異譚めく語りが見られるのだが、それに続く箇所では、現実的な桔梗屋の在りようが如実に語られている。

対方は白露と極つた……桔梗屋の白露、お職だと言ふ。……遣手部屋の蚯蚓を思へば、什麼か、狐塚の女郎花。

で、此の名ざしをするのに、客は妙な事を言つた。

「若い衆註文と云ふのは、お照しだよ。」

「へい、」

「内に、居るだらう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりゃ、無いことはございませんが、」

「秘すな、尋常に顕はせろ。」と真赤な目で睨んで言つた。

「何も秘します事はございません、ですが御覧の通り、当場所も疾の以前から、恁やうに電燈に成りました……ひきつけの遊君にお見違へはございません。別して、貴客様なぞ、お目が高くつて居らつしやいます、へい、えツへゝゝ。最も、其の、些と彼方へ、と成りまして、お望みとありますれば、」

「だから、望みだから、お照しを出せよ。」

「其は、お照しなり、行燈なり、如何やうともいたしますんで、兎に角、……夜も更けて居ります事、遊君の処を、お早く、何うぞ、」

と、ちらりと遣手部屋へ目を遣つて、此奴、お荷物だ、と仕方で見せた。

「分らないな。」
と煙管を突込んで、ばつたり置くと、赤毛氈に、ぶく〳〵して、擬印伝の煙草入は古池を泳ぐ躰也。
「女は蠟燭だと云つてるんだ。」（六）

このやりとりを見る限り、進藤は対手の女郎を「お照し」「蠟燭」と指定しようとするのだが、桔梗屋ではどうやら進藤の言うことが理解できない。それどころか、行燈を準備するなどと言いつつ、進藤を「お荷物」の酔客扱いにして白露という女郎のもとへ案内したというのが実際のところであろう。ただし、白露はといえば「遣手部屋」の「媼さん」が進藤をあしらって「遊君が綺麗で柔順しくつて持てさいすりや言種はないんぢやないか」（六）と言ったとおりの女郎ではあったのだろう。もっとも桔梗屋の反応から見て、そのような「お荷物」の酔客は時におり特別な対応でもなさそうではある。

だが、もしそうだとすると、桔梗屋を訪れた進藤は、目当てとした蠟燭の燃えさしを欲しがる女郎とは会えないことになる。その意味では、白露なる女郎は、怪異譚の主役である蠟燭の女郎とはなり得ないはずであった。進藤自身が「宿へ入つたと云ふものは、唯蠟燭の事ばかりでございますから、圧着けに、勝手な婦を取持たれました時は、馬鹿々々しいと思ひました」（八）と言ったのである。

ところが、その白露が「貴方は御存じね――」（八）と言い、蠟燭を欲しがり正体を見せはじめる。不審なのはこの点である。進藤は「遣手も心得た、成りたけは隠す事、それと言はずに逢はせた、と恁う私は思ふ。……」（八）と言うのだが、これは先に見た桔梗屋の客あしらいとは大きな落差がある。他の人間から見えない白露の言動が、進藤にだけ見えるとすれば、語り手の「狐塚の女郎花」というような言葉は現実味を持ちはじめる。まるで狐狸の正体を曝こうとして返り討ちに化かされるかのように、進藤には狂気の危機が既に迫っている。

三、

いや、白露について不審な点は他にもまだある。展開を先走って作品の末尾を見てみたい。欣八が実際に目の当たりにしたのは白露という女郎ではなく、蠟燭を固めたものに緋の襦袢を着せた人形であった。欣八は、二七不動の和尚に向かって言う。

「大変だ、大変だ。何だつて和尚さん、奴も其まで

に成つたんだ。気の毒だと思つて其の女がくれたんだらうね、緋の長襦袢を何うだらう、押入の中へ人形のやうに坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云ふと、やがて人ぐらゐの大きさに、何十挺だか蠟燭を固めて、つるりと矢張蠟を塗つて、細工をしたんで。そら、燃えさしの処が上に成つてるから、ぼち〳〵黒く、女鳴神ツて頭でさ。色は白いよ、凄いよお前さん、蠟だもの。

（中略）

自然とほてりがうつるんだつてね、火の燃える蠟燭は、女のぬくみだツさ、奴が言ふ……可うがすかい。頬辺を窪ますばかり、歯を吸込んで附着けるんだ、串戯ぢやねえ。

や、少時、魂が遠く成つたやうに、静として居ると思ふと、襦袢の緋が颯と冴えて、揺れて、靡いて、蠟に紅い影が透つて、口惜いか、悲いか、可哀なんだか、ちら〳〵と白露を散らして泣く、そら、とろ〳〵と煮えるんだね。嗅ぐさ、お前さん、べろ〳〵と舐める。目から蠟燭の涙を垂らして、鼻へ伝はらせて、口へ垂らすと、せい〳〵肩で呼吸をする内に、ぶる〳〵と五体を震はす、と思ふとね、横倒れに成つたんだ。さあ、七顛八倒、で沼見たいな六畳どろ〳〵の部屋を転摺り廻る……炎が搦んで、青蜥蜴の蹠打つやうだ。私あ夢中で逃出した。――突然見附へ駆着けて、火の見へ駆上らうと思つたがね、まだ田町から火事も出ずさ。

何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越して居るんだ。」（十）

進藤が「沼見たいな六畳どろ〳〵の部屋を転摺り廻る」狂態を目撃して、欣八は逃げ出したという。すぐに「火の見へ駆上らうと思つた」というのは、四谷見附にあった火の見櫓を指していよう。再び『新撰東京名所図会』に拠ると第十八編（明治33）「麹町」の項「官署　会社　銀行類」の中に「消防第三分署」が見える。これによると、「消防第三分署は麹町七丁目十九番地に在りて麹町警察署に隣れり、明治十五年十二月建設せしものにして木造瓦葺建坪四十八坪、敷地は三百二十三坪あり。構内に建設せる火の見櫓は高さ八間三尺余ありて其半鐘には谷中延命院の銘あり、非常に際し打撃するときは其音遠く青山或は渋谷辺まで達することありと伝へり」という。[10] ランドマーク的建造物であったろう。ただし欣八が伝える、まだ「火事も

出ず」という状況にも問題はありそうである。

三月後には妻の頭髪へ蠟燭を立てて狂気に陥るという欣八は、このときも「下町ア火事だい」などと言い続けたという。

「だが、い、女らしいね。」

と、後へ附加へた了見が悪かつた。

「欣八気を着けねえ。」

「顔色が変だぜ。」

友達が注意するのを、アハ、と笑消して、

「女がポーッと来た、下町ア火事だい。」と威勢よく云つて居た。が、もの、三月と経たぬ中に此のべらぼう、唯一人の女房の、寝顔の白い、緋手絡の丸髷に、蠟燭を突刺して、じりじりと燃して火傷をさした、其から発狂した。

但し進藤とは違ふ。陰気でない。縁日とさへあれば何処へでも押掛けて、鏝塗の変な手つきで、来た〳〵と踊りながら、

「蠟燭をくんねえか。」（十）

くり返しになるが、欣八は白露の姿を見た訳ではなく、緋の長襦袢を纏った蠟燭の人形を見たのである。にもかかわらず、「い、女らしいね」「女がポーッと来た」などと口走るのはどういうことであろうか。欣八には既に狂気が迫っていたと見て間違いなかろう。友達が注意するのを「アハ、と笑消し」たのすらも狂気を疑われよう。欣八はその後、縁日へ出掛けては鏝塗の手つきをしながら「来た〳〵」と踊る。陰気でないのが、進藤の狂態とは異なるのだという。

作品の展開とは前後するが、もうしばらく欣八が狂気に陥っていく過程を確認しておきたい。欣八は、二七不動の縁日が果てた頃、「フト魔が魅したやうな、髪蓬に、骨豁なりとある」（三）男が、燃えさしの蠟燭を持ちかえるのを見つけ、後をつけることにした。欣八は男を「火を背負」った「魔もの」と捉え「放火の正体」を見定めて捕まえようとする。

「棄て、は置かれませんよ、串戯ぢやねえ。あの。魔ものめ、御本尊にあやかつて、めら〳〵と背中に火を背負つて帰つたのが見えませんかい。以来、下町は火事だ。僥倖と、山の手は静かだつけ。中やすみの風が変つて、火先が井戸端から舐めはじめた、的切放火の正体だ。見免して遣つたが最後、直ぐに番町は黒焦

さね。私が一番生捕つて、御覧じろ、火事の卵を硝子の中へ泳がせて、追着け金魚の看板とお目に懸ける……。」（三）

声を掛けて名を問うと、男は「進藤延一」と名乗り、白露の話をはじめた。これについては既に見てきた通りである。やがて欣八は、市ヶ谷は「佐内坂の崖下、大溝通りを折込んだ細路次の裏長屋」にあるという「掘立一室」（七）の進藤の家へ「明白を立て」（七）ると案内される。そこで、「葉鉄落しの灰の濡れた箱火鉢の縁に、じり〳〵と燃える陰気な蠟燭を、舌のようになめらかし」、「蠟燭の灯に目ばかり」（七）光らせる進藤から、白露の話の続きを聞くことになった。話し続ける進藤に欣八は言う。

「疑ふのが職業だつて、そんな、お前、狐の性ぢやあるまいし、第一、僕は其のね、何も本職と云ふわけぢやないんだよ。」

と何故か弱い音を吹いた……差向ひをづり下つて、割膝で畏った半纏着の欣八刑事、風受けの可い、勢に乗じて、土蜘蛛の穴へ深入に及んだ列卒の形で、肩ばかり聳やかして弱身を見せじ、と擬勢は示すが、川柳に曰く、鏝塗りの形に動く雲の峯で、蠟燭の影に蟠る魔物の目から、身体を遮りたさうに、下塗の本体、頻に手を振る。……

（中略）

「一ッ詮索をして帰らう、と居据つたがね、……気にしなさんな。別にお前の身体を裏返しにして、綺麗に洗ひだてをしようと云ふんぢやねえ。可いから、」

と云ふ中にも、ぢろりと視る、そりや光るわ、で鏝を塗つて、

「大目に見て遣ら。ね、早い話が。僕は帰るよ、気にしなさんな。」（七）

欣八は「魔が魅したやうな」あるいは「魔もの」のように見える進藤が、「蠟燭の灯」を前に目を光らせて話し続けるのに恐れを感じ、「本職」の刑事でないことを明かして逃げだそうとする。（「頻に手を振る」身ぶりが、「鏝を塗」る手つきと言われることにも注目しておきたい。それは、欣八が狂気に陥った後の身ぶりとそっくりである。）ところが、進藤の方が帰そうとせず、欣八は話の先を聞かざるを得ない。そしていよいよ緋の襦袢を着せた蠟燭の人形に火をつけて見せる進藤の狂態を目撃し、蠟燭の匂いに晒されて狂気に陥る。その延長線上に欣八が「下町ア火

事」と幻を見ることは、おそらくは、進藤が蠟燭の女郎の正体を見定めようとして白露を知ったのと相似の関係にある。欣八は、進藤の家で緋の長襦袢をまとった蠟燭の人形が燃えるのを見て、蠟が溶け出す匂いを嗅いだとき、下町を火事にする「放火の正体」を見出したのである。そして、それは欣八の中で、現実以上のリアリティを持つようになる。

こうした一連の様子を見れば、吉田遼人氏が指摘した「発狂の連鎖」は、どういう訳か狐狸・魔ものに出会い、その正体を曝こうと接近した者の間で、蠟燭の女郎の話による恐怖と、蠟燭の「香」とによって拡大する。そして蠟燭をもらい受けるため所構わず縁日に現れる。しかし狂態は人によって異なる。こうした特徴がある。ただし、白露と対面したかどうかには拠らないようである。

だとすれば白露は何者か、さらに不審は募る。

四、

さて、進藤は白露についてこうも話す。

恁う云ふ事をお話し申した処で、真個にはなさりますまい。第一そんな安店に、容色と云ひ気質と云ひ、名も白露で、果敢ないが、色の白い、美しい婦が居ると云つては、それからが嘘らしく聞こえるでございませう。

其の上、痴言を吐け、とお叱りを受けようと思ひますのは、娼妓で居て、宛然、其の婦が素地の処女らしいのでございます。えゝ、他の仁には先ず兎に角、私だけには真個でございました。（七）

白露は桔梗屋の女郎でありながら、少なくとも進藤にだけは「素地の処女」らしく思われたというのである。肉体関係を持たなかったことを仄めかすのだろう。進藤自身が「嘘らしく」と言うように、「お職」の女郎を相手に容易に信頼できる言い分ではあるまい。また、先述したように、蠟燭を欲しがる女郎を指名した進藤は、「お荷物」の酔客としてあしらわれ、白露をあてがわれたのである。なおかつ、語り手はそのように話す進藤が、実は狂気に陥っていることを明かしていく。真実ははっきりと語られてはいない。しかし、このような状況証拠からすれば、桔梗屋に白露という女郎はいたのかもしれないが、進藤が白露を蠟燭の女郎と見て関係が持てなかったのは、狂気のためと判断した方がよさそうである[11]。白露の肌の「色の白」さは、何

よりも蠟燭に通じる。

また進藤は、白露のいる桔梗屋へどれほど通っているのだろうか。「度かさなるに従つて、数を増し、燈を殖して、部屋中、三十九本まで、一度に、神々の名を輝かして、そして、黒髪に絵蠟燭の、五色の簪を燃して寝る」（十）というのであるから、それなりに通ったのだろうが、おそらく現在までは続いていないだろう。これも、既に吉田遼人氏が指摘する通りだが、進藤が結核に罹患していると思われるからである。作品中「内へ引く、勢の無い咳をすると」（一）、「延一は続け状に三つばかり、しやがれた咳して」（八）、「延一は、ギクリと胸を折つて、抱へた腕なりに我が膝に突伏して、かツかツと咳をした」（九）などと、度々言及される進藤の咳がそのことを示している。また、進藤が「其の頃、小石川へ勤めました」（八）と言うのは、病のために失職したことを示唆しているのだろう。二七不動へ蠟燭をもらいに来たとき、進藤は住職に、次のように言っていた。

「済みませんがね、もし、私持合せがございません。えゝ、新しいお蠟燭は御遠慮を申上げます。えゝ、」

「はあ。」と云ふ、和尚が声の巾は押被さるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもじや〳〵と動かして聞返す。

此がために、窶れた男は言渋つて、

「で、ございますから、何うぞ蠟燭はお点し下さいませんやうに。」（二）

燃えさしの蠟燭を貰うためでもあろうが、進藤が金銭に困るような生活であったのは事実であろう。また、「柔しい女房もございました」（八）と言うのは、金銭的な困窮のためか、あるいは狂気のために妻と別れることになったのだろう。そのように金銭的に困窮し、結核と思しき病を患った客を桔梗屋が受け容れたとは思われない。

そうすると、進藤が二七不動をはじめとする縁日から持ち帰った蠟燭は、どこへ運ばれるのだろうか。進藤は次のように言って、欣八の前に二七不動の蠟燭を差し出す。

困果と業と、早や此の体に成りましたれば、揚代処か、宿までは、杖に縋つても呼吸が切れるのでございませう。所詮の事に、今も、婦に遣はします気で、近い処の縁日だけ、蠟燭の燃えさしを御合力に預ります。即ち此でございます。（十）

桔梗屋の白露のもとへ届けられていないとすれば、欣八

を家まで伴ったこの日と同じく、蠟燭は持ち帰られることになる。それらの蠟燭はもちろん、進藤の押入にある緋の長襦袢を纏った蠟燭の人形となったはずである。進藤が欣八に話す白露は、どこまでが桔梗屋の女郎で、どこからが家の押入にいる人形なのか、判然としないところがある。

進藤は、次のように白露と会話を交わしたという。

……時に、其の枕元の行燈に、一挺消さない蠟燭があつて、寂然と間を照して居りますんでな。

——彼は——

——水天宮様のお蠟です——

と二つ並んだ其の顔が申すんでございます。灯の影には何が映るとお思ひなさる、……気に成ること夥しい。

——消さないかい——

——堪忍して——

是非と言へば、さめ〴〵と、名の白露が姿を散らして消えるばかりに泣きますが。推量して下さいまし、愛想尽しと思ふがまゝよ、鬼だか蛇だか知らない男と一つ処……せめて、神仏の前で輝いた、あの、光一ツ暗に無うては恐怖くて死で了ふのですもの。もし、気に成つたら、貴方ばかり目をお眠りなさいまし。

——と自分は水晶のやうな黒目勝のを、すつきり睜つて、——昼さへ遊ぶ人がござんすよ、と云ふ。

可、神仏もあれば、夫婦もある。蠟燭が何の、と思ふ。其の蠟燭が滑々と手に触る、……扱帯の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも。幾本となく忍ばしてあるので、ぎよつとしました。残らず、一度は神仏の目の前で燃え輝いたのでございませう……中には、口にするのも憚る、荒神も少くはありません。（十）

進藤は蠟燭の「灯の影」に「映る」ものをさえ感じて恐怖の度合いを深めていく。（もっとも、「扱帯の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも。幾本となく忍ばしてある」というのは、押入の人形を指しているようでもある。）そして、ここで注目しておきたいのは、「枕元の行燈に」蠟燭が灯されていたことである。桔梗屋では、「御覧の通り、当場所も疾の以前から、恁やうに電燈に成りました」（六）と言っていた（本稿二節引用の波線箇所）はずである。今現在の桔梗屋では行燈は使わないが、過去には行燈を使ったということであろう。さらに白露は、蠟燭に執着する理由を口にする。白露は「鬼だか蛇だか知らない男と一つ

処」で寝なくてはならぬ自らの境遇ゆえに、「神仏の前で輝いた」蠟燭の燃えさしを求めているという。かつての妓楼で蠟燭の灯のもとに男たちの対手をせざるを得ない女郎がいたとすれば、進藤が見る行燈の蠟燭は、過去の妓楼の在りようを示す灯になりはしないだろうか。

吉田遼人氏の言う「狂気の連鎖」の時系列をたどれば、〈進藤の友達〉→〈進藤〉→〈欣八〉→〈欣八の友達〉の順に狂気は連鎖している。この連鎖を遡ることは、荒唐無稽なことであろうか。進藤に蠟燭の女郎の話をした友達は、誰からこの話を聞いたのか。そのまた前に順に遡れば――、いつかは噂の出所の女郎に行き当たるはずである。

本作の語りが前近代的な怪異譚に進んで言及するのは、大正二年当時の番町やあるいは新宿といった身近な土地が、実は一歩踏みはずせば怪異譚になりかねない過去に満ちていることを知っているからではなかろうか。

先に引用した場面で行燈に水天宮の蠟燭が灯されているのは、白露との初会のとき、車夫の提灯からもらい受けた蠟燭を持っていった進藤が「何方の御蠟でござんすの――」と「お極り」通りに尋ねられ、神仏に供えた蠟燭の燃えさしを喜ぶと聞いていたことから「水天宮様のだ、人形町の」（八）と嘘を言ったためである。白露はその嘘に気づいており「蠟燭の嘘」を言うと「怨みます」と言いながら、箪笥の抽斗から本物の水天宮の蠟燭を取り出す。

此ほどまでに、生命がけで好きなんですもの、何処の、何うした蠟燭だか、大概は分ります。一度燃えたのですから、其の香で、消えてから何のくらゐ経つたかゞ知れますと、伺つた路順で、下谷だか浅草だか推量が着くんです。唯今下すつたのは、手に取ると、すぐに直き近い処だとは思ひました、……では、大宗寺様のかと存じましたが、召上つた煙草の粉が附着いて居ますし、御縁日ではなし、かた〳〵悪戯に、お欺ぎだとは知つたんですが、お初会の方に、お怨みを言ふのも、我儘と存じて遠慮しました。今度ツからは、たとひ私をお誑しでも、蠟燭の嘘を仰有ると真個に怨みますよ、と優しい含声で、ひそ〳〵と申すんで。

最う、実際嘘は吐くまい、と思つたくらゐでございます。

部屋着を脱ぐと、緋の襦袢で、素足がちらりとすると、ふツ、と行燈を消しました。……底に温味を持つたヒヤリとするのが、酒の湧く胸へ、今にもい、薫で

颯と絡はるかと思ふと然うでないので――

カタ〳〵と暗がりで箪笥の抽斗を開けましたがな。

――水天宮様のをお目に掛けませう――

然う云つて、柔らかい膝の衣摺れの音がしますと、燐寸を撥と摺つた。（九）

蠟燭を「生命がけ」で好きと言い、燃えさしの香を嗅ぎ分け、箪笥に保管し、衣類の下にまで忍ばせるというのは尋常のことではない。というよりも、だからこそ蠟燭の女郎は奇態が噂になったのだろう。さらに進藤は、白露が次々と蠟燭を持ち出す様子を話す。

此は、下谷の、此は虎の門の、飛んで雑司ケ谷のだ。いや、つい大木戸のだと申して、油皿の中まで、十四五挺、一ツづ、消しちや頂いて、それで一ツづゝ、生々とした香の、煙……と申して不思議にな、一つ色ではございません。稲荷様のは狐色と申すではないけれども、大黒天のは黒く立ちます……気がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇つた浅黄がございましたり。

其の燃えさしの香の立つ処を、睫毛を濃く、眉を開いて、目を恍惚と、何と、香を散らすまい、煙を乱すまいとするやうに、掌で蔽つて余さず嗅ぐ。（九）

燃えさしの蠟燭の「生々とした香」に「恍惚と」して「余さず嗅ぐ」白露の様子は、やはり狂気に接近していよう。そして「牛鍋のじわ〳〵酒に、夥間の友だちが話し」た噂話のなかの言葉は、まさにこのような奇態を伝えていたはずである。進藤は桔梗屋を訪れる前、車夫の提灯の蠟燭から煙草に火をつけ「蠟燭の香」を「脳へ差込ま」れたと言う。奇態を噂する言葉が、嗅覚という身体的感覚を伴って、そのリアリティを獲得するのだろう。かくして進藤は、かつて自らの境遇ゆえに狂気に接近せざるを得なかった女郎の、その遣り場のない思いと関係を持つことになる。進藤が対面した白露は、このように時間を超えたひとりの女郎だったのではなかろうか。対面せずとも狂気がもたらされる理由であろう。

おわりに

泉鏡花『琵蒟本』の語りが前近代的怪異譚に言及しつつ、その舞台となる番町や桔梗屋を語っていくところに注目した。一方で、これらの場所が、むしろ極めて現実的な場所であることも確かである。とくに桔梗屋は、進藤が蠟

燭を欲しがる女郎を探しに訪ねたのを「お荷物」扱いにするなど、一面では怪異譚とは縁遠い。また、欣八は進藤の家の押入にある緋の長襦袢の人形は見たが、桔梗屋の白露に会った訳ではない。そのため、進藤や欣八が遭遇する怪異の原因が、白露という女郎にあるとは断じがたい。しかし、吉田遼人氏の表現を借りれば、狂気が「連鎖」していることは確かである。

本稿は、「連鎖」する狂気を遡る可能性を探ったものである。かつて、その境遇から、神仏に供えられた蠟燭を求めるようになった女郎の奇態が噂となった。その噂は言葉となって広まり、時間をも超える。前近代的な怪異を志向することは、過去への通廊となるのではないか。だから、奇態を伝える噂の言葉が蠟燭の「香（におひ）」のリアリティを得るとき、大正二年でさえも怪異に遭遇することになる。本作が描き出すのは、そうした怪異譚ではないだろうか。

『菎蒻本』というタイトルは、村松定孝が「題名は、内容が黒髪に絵蠟燭の五色の簪を燃して寝る遊女の話であるのにちなみ、近世の洒落本の異称を当てたもの」と解題する通りである。[12] 一方で「本作は洒落本の軽妙洒脱やうがちから隔たること遠い」という指摘もある。[13] 大正二年の当代までもひとりの女郎の思いが残るとすれば一定の重みはあろう。

なお、進藤は、白露が「自分で刺青（ほりもの）のやうに縫針で彫つて、彩色（いろどり）を」施した絵蠟燭を、天神髷（まげ）に結った「其の髷の真中へすくりと立てゝ、烏羽玉（うばたま）の黒髪に、ひら〳〵と簪（かぐり）火（び）のひらめくなりで、右にも成れば左にも成る、寝返りもする」（十）と言った。絵蠟燭は主に東北・北陸を産地とするという。[14] そうした地方出身の女郎の姿が想定されているのかもしれない。

注

(1) 吉田昌志「五 「番町もの」の世界」（『新編泉鏡花集』第四集「解説」・岩波書店・平成16年）。

(2) 泉鏡花『番茶話』「蛙」（大正15年）〔引用は『鏡花全集』巻二十七（岩波書店・昭和63年・第三刷）に拠る〕。

(3) 吉田遼人「泉鏡花「菎蒻本」試論―わが身に迫る恐怖―」（「文学研究論集」第27号・明治大学大学院・平成19年9月）。以降、本稿で吉田遼人氏の論考に言及するときはこの論考を指す。

(4) 「風俗画報」臨時増刊『新撰東京名所図会』第十九編（明治32年6月）〔ただし、引用は『東京名所図会・麹町区之部』（睦書房・昭和44年）に拠る〕。

(5)『新編泉鏡花集』第四集（注(1)に同じ）の「作中地名索引」には、「番町の大銀杏」が立項されており、「鏡花宅（下六番町11）の前にあった銀杏をさすか（泉名月「鏡花と住まい」『鏡花全集』月報15、岩波書店、昭和50年1月）．この大銀杏は鏡花作「星の歌舞伎」にも出る」の指摘がある。なお、「作中地名索引」には、「二七の不動尊」や「帯坂」などについても立項・解説が既になされている。

(6)菊岡沾凉『江戸砂子』（享保17年）には、「皿屋敷　牛込御門の内。むかし物語ニ云、下女あやまつて皿を一ツ井におとす、その科により殺害せられたり、その念此所の井に残りて、夜ごとにかの女の声して、一ツより九ツまで十をいはで泣さけぶ、声のみありてかたちなしと也。よつて皿屋敷とよびつたへたり。牛込御門台のかたはらにやしろあり。俗に皿明神と云とぞ。かの女の霊をまつりたりといふ。それよりしてその事なしと也。此社は稲荷の社也」とある〔ただし引用は、小池章太郎編『江戸砂子』（東京堂出版・昭和51年）に拠る〕。

(7)大石学「第２章　武家地」（『地名で読む江戸の町』第Ⅱ部・ＰＨＰ文庫・平成25年）を参照。なお本書には他に「番町七不思議」の存在が紹介されている。「番町にいて番町知らず」「城家の団子老婆」「「朽木の幽霊」「御手洗の足洗い」「八ツの拍子木」「宅間稲荷の霊験」「狸囃子」の七つだという。

(8)鳥山石燕『今昔画図続百鬼』（安永８年）には、画図ともに以下のような詞書が記されている。「皿かぞえ／ある家の下女十の皿を一つ井におとしたる科によりて害せられ、その亡魂よなよな井のはたにあらはれ、皿を一より九までかぞへ十をいはずして泣叫ぶといふ。此古井は播州にありとぞ。」「舟幽霊／西国または北国にても、海上の風はげしく浪たかきときは、波の上に人のかたちのものおほくあらはれ、底なき柄杓にて水を汲む事あり。これを舟幽霊といふ、これはとわたる舟の楫をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。」〔ただし、引用は『鳥山石燕　画図百鬼夜行全画集』（角川ソフィア文庫・平成17年）に拠る〕。

(9)泉鏡花『海異記』（明治39年）〔引用は『新編泉鏡花集』第四集（注(1)に同じ）に拠る〕。

(10)「風俗画報」臨時増刊『新撰東京名所図会』第十八編（明治33年５月）〔引用は、注(4)に同じ〕。

(11)本作の白露をどのような存在と捉えるかについては議論があり、一定しない。橋正典は白露に「深い罪障意識と恐怖心」を見出し（『鏡花変化帖』「第二章　雛人形と蠟人形」（国書刊行会・平成14年））、吉田遼人はそれに疑義を呈しつつ、白露を「場末にすぎなかった空間の一地点が中心化されるという特異な現象」を引き起こす「特異性を付与された存在」〔注(3)に同じ〕と見る。

(12)村松定孝「鏡花小説・戯曲解題」（『泉鏡花事典』・有精堂・昭和57年）

⑿ 注⑴に同じ。

⒀ 内藤郁夫「伝統絵蠟燭の研究Ⅰ：歴史と製造法を中心に」（「九州産業大学芸術学部研究報告」第38巻・平成19年12月・http://hdl.handle.net/11178/7599）によると、現在、「会津若松市・庄内地方（鶴岡市と酒田市）・長岡市が伝統的絵蠟燭産地として知られて」おり、「18世紀中頃、絵蠟燭は庄内地方で発明され、会津若松では庄内地方に遅れて生産が始まったと推論」され、「会津若松からの技術の伝播により、長岡でも絵蠟燭の生産が開始されたと推論」されるという。

〔付記〕『蓽蒻本』本文の引用は、『新編泉鏡花集』第四巻（岩波書店・平成16年）に拠る。旧字は適宜通行の字体にあらため、ルビは一部を除き省略した。傍線は論者が附したものである。